

小説 智恵子抄

佐藤春夫



角川文庫

小説 智恵子抄

佐藤 春 夫



角川文庫

2110

角川文庫

小説 智恵子抄

昭和三十七年二月二十日 初版発行
昭和四十三年一月三十日 十九版発行
昭和四十五年十一月三十日 改版八版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

著者 佐藤 春夫

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子
東京都豊島区高田一ノ十二

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三 株式
会社 角川書店
電話東京(285)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

小説 智恵子抄

佐藤 春夫

角川文庫

2110

本書は著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、
原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひ
らがなに改めた。

（編集部）

はしがき

「小説智恵子抄」はもと「愛の頌歌^{ほめうた}」という高村光太郎の詩集「智恵子抄」のなかの一句を本題とし「小説智恵子抄」をその副題として、雑誌「新女苑」のために昨年九月号以降本年八月号まで一か年間連載して成ったものである。

単行出版にあたってかつての副題を本題と取りかえたのは、書肆^{しよし}の希望に応じたものである。この題名は詩集「智恵子抄」の大きい世に行なわれるのに便乗しようとするかのもの欲しげなものにみえるのはおもしろくないが、事実としてこの作は詩集「智恵子抄」を小説化しただけの制作なのだから、小説「智恵子抄」と名告^{なのこ}るのがかえって正直なような気もするので作者は一考のち、書肆の申し出を承認した。

この作の連載ちゅう、詩集「智恵子抄」はあるいは舞台上上演されあるいは映画化されるなどのこともあって、高村氏の詩集「智恵子抄」の名は世に轟^{とどろ}きはなはだ大衆化されたようであるが、拙作は夙^{つと}に企画されておのずから別個の志もあり、あえて時の流行に従って人真似^{ひとまね}をしたわけではない。

この作におけるわたくしはいわば詩集「智恵子抄」という台本によって、これを小説的に演出し、またある時は光太郎となり、ある時は智恵子となり一人二役の演技で俳優兼舞台監督のよう

な仕事をしているのである。解釈が浅く演技が拙くて、原作の高い精神と情趣とをどれだけ伝ええたかはおぼつかない。詩集「智恵子抄」に心酔する人々の満足するところとなるか、どうかをあやぶむものである。それでも小説の体だけは得ているつもりである。

詩集「智恵子抄」は見かけの単純にもかかわらず、その詩人の人がらをそっくりの複雑で隠約の多いものだから、その高い精神と深い深い詩趣とは、わが拙い散文では容易に伝ええない。識者の不満は是非もなからう。しかし年少の読者が詩集「智恵子抄」を解読のためには多少の役だつところのあるのも疑われないし、また原詩集がわが解釈の不備で傷つくはずのないのを信じ、安んじてこれを上梓する。

詩集「智恵子抄」はだいたいとして事実、実感を重んじて書かれた半記録らしいのに較べて、わたくしのは徹頭徹尾、小説で虚実取り交えたもので、作中人物も実名あり架空の人名あり、作中の土地も踏査の暇もなくすべて居ながらにして名所を知った架空風景である。その心して読みたい。

もと若い女性のための雑誌に執筆したとはいえ、器用な仕事をする才覚のないわたくしは、いつものとおりわが性に従って制作し、別に若い女性を目標に、これを書いたというわけでもなかった。ひとり年少の子女とのみはかぎらず、すべてのわが読者がこれによって真の愛情の様相を知る端緒をここに見いだしてくれるならば作者の本懐は達せられたのである。

一九五七年暮き日

東都目白坂にて 佐藤春夫 誌す

目次

はしがき

第一部 静寂の価

第二部 同棲同類

第三部 魂の別離

注 釈

解 説

草野 心平

三

七

六

一三

一五

二七

第一部 静寂の価

一

洋画家椿英介は、先年目白の女子大学家政科出身の和子を妻としてすでに三年以上になるが、新婚の夢はさめず、今だに幸福に酔うような生活をつづけていた。

和子は学校時代の趣味から出発した演劇から女優を志し、舞台生活を許してもらえそうな相手として良人を選んだもので、舞台に立っては近代芸術の精神を理解した新人と重んじられる一方、家庭のよき主婦として椿夫婦の芸術的家庭生活は当人たちを満足させるばかりではなく、他も羨むばかりで、友人のなかには椿の奴は細君ができて以来友人を疎略にするなど、ありもせぬ難癖をつけて嫉き気味なものもあるほどであった。

和子はこのころその所属劇団の近く上演するはずのハウプトマンの「寂しき人々」で、妻のある学者から愛される女学生の大役をふられて、舞台稽古に張り切っていた。

新秋のある夜英介は、舞台稽古から帰って、台所をかたづけ終わった妻を茶の間に待ちかまえていたが、その日は夜の稽古は休みというのを幸いに言いだした。

「どうだ。和子、君の友人でいいお嫁さんになりそうな素質のヤング・レディはいないものかね、もちろん美しくなくてはならない。芸術家の妻になる候補者だが。僕は今日留守居の一日じゅうそればかり考えつづけていたものだ」

「どなたかにそんな人をお頼まれなすったの」

「いや、誰からも頼まれない。僕が自分から思いついたのだ、友人のために」

「どなたなの、結婚の相手をあなたから探してもらわなければならないというたのもしい芸術家は？ わたくしの知っている方、知らない方？ 知らない方ならお目にかかってから似合いそうな方を考えたほうがいいわ」

「わざわざ紹介するまでもなく、君も先刻ご存じの高村君のための候補者だ」

「高村さんなら、降るほどありましよう。あなたなんかおせっかいをしないで、うちの劇壇のひとつでも大騒ぎよ高村さんの詩といえよ」

「でも、そんなのはだめだよ」

「女優なんかでは？」

「そういう意味ではない、気に入らええすれば芸人だろうが女優だろうが、そんなことにかまう人ではないが、洋行帰りの名家のおん曹子そうしのところへその詩が気に入って大騒ぎするようなのは、きつとだめだと言うのさ」

「へえ？ むつかしいのね」

「うん、あの人は見かけはあのとおりだが、あれでなかなか気むずかしいところがあるよ、き

つと」

英介はそう言っただけで、それ以上は、すぐ説明しようとしなかった。簡単には説明できそうもないと思つたからであらう。実のところ彼自身にもまだよくはわかつていなかったのである。彼は不意に座を起つて廊下づたいに画室に行つたと思つたら、すぐに雑誌「スバル」を一冊握つて帰り、どかっとふたたび座にもどると、雑誌のページを繰っていたが、やがて「泥七宝」高村光太郎とあつたところをひろげて和子の方へ突き出し、

「読んでごらん。高村のこのごろの生活まる出しなのだから。そこが詩としていいのかもしれないが、僕には詩なんぞ、どうでもいい。美術家のくせに絵も彫刻も放げ出して詩ばかり作つてゐる。それだけでもいいかげん気がもめるのに、ロクでもない詩人なんて奴ばかりにつき合つてゐるうちにこんなことになつてしまいやがった。もっとも高村の正直一方の直言をけむたがつて相手にしない美術界に高村が愛憎をつかしたのは無理もないのだが」

と英介がそんなことを言っている間、じつと雑誌に読み入っていた和子は、

「あんまりあつさりしているのですね、これだけではなるほどわかるまい。僕はこのごろ奴の生活が人の噂で

耳に入ってくるのと彼の詩とを読み合はせているのだが、奴はこの雑誌のロクでもない連中と「パンの会」というのをこしらえていて、毎月日本橋や築地あたりに会合しているらしいが、その二次会のくずれがめちゃくちゃらしい。高村は弥次馬気分でみんなと行動する男ではないからいづれ単独行動らしいが、それにしてもおかしいのだ。はじめは吉原の河内楼とかいうのに気に

入ったのがあって、通^かっているうちに、女は高村がりっぱな家の人だと知ってちやはやしだしたので、高村はだんだん女から遠ざかりはじめた。そうしてよいいなわが身分などの告げ口をしたKという男に腹を立てているうち、Kは高村の通わなくなったあと、その女のところへ通いだしたので、高村はKのただ何気ないおしゃべりを、女から自分を遠ざけるための告げ口のように解釈したのは多少被害妄^{もうそうまき}想的だが、それに幾分の悪ふざけ気分もまじって高村からKに女を奪ったと決闘を申し込んだというのだ。Kとしては、高村が怒った理由もよくわからなかったろうが、その点は僕によくわかつている。彼は父光雲^{くわんうん}の子と言われるのに負担を感じ、同時に自尊心も傷つけられる様子で、ニューヨーク時代、僕にそのことをよく告白したものだ。彼は父光雲を日本の彫刻の伝統をついでいる人と尊敬すると同時にそれを破壊して日本の彫刻を世界の近代芸術の歩調に合わせる義務を自分に感じるだけの自尊心を持っていて、近い将来^{だいに}乃父光雲とは当然正面衝突は避けられないものと思^{おも}っているのだ。海外留学だって父の恩恵^{おんけ}を嫌^{きら}って自力の苦学でずいぶん切りつめた生活をしていたものだ、あの貧寒に甘んじて勤勉努力する態度には全く頭がさがったよ。大成する人物だと僕はそのころからずっと尊敬してただけに、近ごろの彼の生活には不満なのだが、ともかくも河内樓の女はそういうふうに過ぎてしまった。しかしその女はよほど気に入っていたらしい。なにしろのぼせ性の熱情漢なのだから。ここに、

両国橋の橋の上

白のかすりに古袴^{ふるばかま}

三十ちかい馬鹿ばかものの
柄がらにないよなふさぎかた*

というのがあるが、それが、彼の失恋のすがたを自嘲じちやうしたものであろう。以前 *Les Impressions Des Quinias* 「女の印象」という題で一まとめになったフランス語の題の連作や「地上のモナ・リザ」など、みなこの同じ雑誌で僕の読んだ詩だが、僕は高村が河内楼とやらの女に馴染なじんでいるのをその時から知ったものだ。だって、その連作「女の印象」には特に「Caotia Tchi-Leau 河内楼なるわがよき女友達に」というフランス語がそえられていたのだから、一目瞭然いちりょうぜんなわけだ。それから「失われたモナ・リザ」で彼女が歩き去ったのだから、高村が歩きかえったのだから知らないが、ともかく河内楼の女はもうこれですんだのだと思った。雑誌の同じ号であった *Præsentation* * という題の、

『短統短剣』

かう叫んだ声が口の外へ出ずにしまった嬉うれしさ。

という句のある詩では高村がKに決闘を挑いどんだという噂が思い出されたものだが、それも何事もなくてよかったと思つているところへ、今度の号のこの泥七宝どろしぼだ。高村は今度は北廓きたがわから河岸かきを変えて、品川や深川あたりをうろついているものとみえる——」

われをなげけとてか ひや酒

つりし蚊帳かやのみづいろに

品川の夜のしのめ*

月さへいでて

君の手のつめたさに

海の潮うしほの鳴ることよ*

腕をくんで考へる

渡舟わたしぶねに月がさす

月が冴さえれば気がめいる

水は流れて渦うずをまく*

「——ね、和子、君にはわかるまいが、これらもみんな品川か深川通いの情景らしいが、高村はいつも酔っぱらっているところを見ると、無心で遊び呆ぼけているのでもないらしく、それだけにいたましい気もするしなんだかめちゃくちゃになってひどくいらしているようなところが、このごろの詩に見えているのが僕には不安なのだ。あの堂々たる体たい軀くをそなえて三十近くなっていれば遊ぶにもさかりだろうが、働くにもさかりでなくてはなるまい。その一時期をほんとうに

楽しむでもなく、うかうかと時を費やしているのは惜しいが、それよりもそんな日々がつづいてあたらあのかの径寸の美玉ひぎよく*のような大才を泥どろのなかへ埋めてしまふのはもったいない。僕はいやだ。

そこで僕は今日一日花を描きながら考えた。高村ももう結婚してもいいころではなからうか。家で選んだようなお上品なお嫁さんでうんと言う高村でないことはわかつているから、おせっかいだと叱しかられるのを覚悟で、ひとつお嫁さんの候補を推挙してみよう。それが受けつけられなくとも、ついでに今日このごろの行状を一つ忠告してみる機会にしたいのだ。気に入った細君ができればきつと落ちついて仕事に打ち込む人だと思えるからね。こちらからいうまでもなく、当人でもうその気になっていてもいいころだ。このごろ光雲先生の屋敷のうらに地固めの作業がはじまっているというのも、その準備ではないかと考えられるし」

「わかりました。そういうお嫁さんの候補も思い当たらないでもありませんから、すぐにもその心当たりを一応あたってみることにしましょう。あなたのお考えには大賛成ですから」

心のやさしい夫の友情の溢あふれる話を聞きながら、和子の身中にもなんとなく夫に協力して夫の友人のために良き妻を探し出して夫の友人の夫人を自分の親友にする幸福を夢みはじめているうち、身中に去来する一つの影を捉とらえたものであった。そうして夫を見上げながらたずねた。

「高村さんいったいお幾つになるのでしょうか、若いような老成したような方ですけれど」

「そうさね、僕がニューヨークにいて彼と相知ったのが千九百七年だったから今から五年前、その時高村は学校の特別賞を受けて翌年度の特待生に挙げられたのが、二十五だと言っていたとおぼえているから今年二十九かな——そうだ僕より二つ上だから」

「そうでしょうね、三十近い馬鹿者のと歌っているところをみると二十九らしいわね」
和子はそう言いながら心に意中の友人のおおよその年を数えてみながら、もう一つ二つ若いとなおいいのだが、などと思った。

二

和子が今おもい浮かべているのは、特に親しい友というのではなく、ほんの顔見知りから一步を出た程度の人であったが、親友に持ってみたいようなとかねがね思っている人であった。

同じ学校の二、三年下級にいて、同じように学校の演劇仲間の一人であった。もっとも同じ演劇でも、その人のほうは演技でなく、舞台装置という少し偏った趣味を楽しみにしていた長沼智恵子という人なのである。

その装置には和子もいつも感心していたから一度それを言いたいと思っていたけれど、その人は田舎なまりを氣にする程度ではなくひどく無口な人つき合いを好まない人らしく寮の生活をしながら、同じ寮内でも親密な友たちもなく、いつも部屋やの隅すみでひとりいるような内気な人であったから上級生の和子などは気軽に話すはずもなく、お互いに黙礼を交すだけの間柄で過ぎた。

それでいてかえって親しかった人よりは思い出の深いのは、その人が一風変わった個性の強い存在であったためでもあろう。

時々どこかの乗馬倶楽部から馬を借り出してきて校庭や付近の草原を乗り回していたが後には校長が運動のためには馬より自転車の方が危険が少なからうとすすめたというので自転車にし